
メッセージ

吉野圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メッセージ

【Nコード】
N49000

【作者名】
吉野圭

【あらすじ】
雨の日、彼女が置き忘れていったもの

雲の隙間から青空が覗いた。

交差点で立ち止まる人々は空を見上げ、ぱたぱたと傘を閉じていった。そして邪魔な荷物と化したそれを手に、隣同士、微笑む。

「今日は、夜中まで降ると言っていたんですがねえ」

「最近、天気予報もあてにならないから」……

傘を二つもぶらさげた僕は、途方に暮れた。女物のパステルの傘が虚しく揺れる。

「神様が予報を覆したか」

つぶやき、ため息をついた。そして青信号で動き出した人波の中、いつまでも立ち尽くしていた。

「境界線が引かれてる気がするの、私たちの間には」

一週間前の晩、彼女が突然言った。

「どういう意味？」

聞き返すと、彼女は僕から目をそらして答えた。

「何故か分からないけど、あなたと話していると、いつも隔たりを感じる。まるで、大きな川を挟んだ岸の、こちらと向こうで話してるみたいに」

僕は言葉を返すことができなかった。彼女の言っていることは、たぶん、本当だったから。

「私ずっと、寂しくてたまらなかったのよ。いつかこの境界を越えられると思って、努力してきたけど、駄目だった。もう限界なの。別れましよう」

次の日、彼女は部屋を出て行った。2年間の同棲で、増えた荷物と一緒に。

僕は温度の下がった部屋で、一人、彼女の台詞を反芻してみた。
「境界線」

たしかに。その境界線を引いたのは僕だった。僕は境界越しにしか、他人の言葉を受け取ることができず、送ることもできない人間なのだから。

27歳、会社勤務。人並みの社会常識は身に付けてきたつもりだった。けれど忙しい毎日の中で、いつのまにか人として肝心の部分、感情を失ってしまったていた。いや、失ったわけではない。感情が消えてしまったわけではないのだ。ただ、気持ちをシャットアウトしてしまう。感情が動いても、見て見ぬ振りをする。そうしているうち、いつしか他人とも距離を保って接するようになっていた。その距離は、どんなに親しい友人に対しても変わらなかった。もちろん、彼女に対しても。

僕は間違っていたのかもしれない。距離を保つことが大人だと思いつ込んでいた。そうして社会で立派に生きている気になっていた。本当は、ただ臆病なだけだ。他人に心の中を覗かれるのが怖かったのだ。そんな臆病のせいで、僕は大切な人を失ってしまった。一生一緒にいたいと思っていた、その気持ちを、伝えることもできないままに。

——彼女が出ていき、眠れない夜を一週間過ごした朝。
ふと、天気予報をチェックしている自分に気付いた。

いつも天気は無頓着な彼女のために、傘を持って出かけるのは僕の役だった。今日は昼から雨が降り出し、夜まで続くとのこと。アイツのことだから、きっと傘を持たずに出勤しただろう。

知らないうちに、押し入れを探していた。

一つだけ、女物の傘を見つけた。パステルブルーの傘。たしか、彼女のお気に入りだったはずだ。

思わずふき出した。

「やっぱりアイツ、天気に無頓着だ」

そして僕は会社を休み、2本の傘を手にかを出た。もう一度だけ

彼女に会えるかもしれない、そんなことを期待しながら。

日が照り出した。信号前に止まる車の水滴が、きらきら光つてすべり落ちていった。道行く人々是不審げに、青で渡らない僕を眺めていく。

僕はパステルの傘を見下ろし、軽く肩をすくめた。やっぱり、もう一度彼女に会おうなんて、バカな考えだった。

雨が上がったのは、きつと神様からのメッセージ。二度と彼女に会ってはいけない、ということだろう。終わってしまった恋を追いかけるのはお前の性に合わない。さっさと忘れろ、そういうことだ。

THE END。

心の中でつぶやき、回れ右して、真っ直ぐ歩き出した。そのまま地下鉄の入り口を降り、自宅方面の電車に乗った。

“次は二子玉川園、二子玉川園”……

いつのまにか、電車は地下を脱け出していた。駅ビルの白い壁に、夕日のオレンジが映えている。

「わあ、見て、きれい」

車内のどこかで、小さな女の子が叫んだ。電車が川に出て視界が開け、西の窓にドロップのような夕日が輝いていたのだ。東側の席に座っていた僕は、それを、不思議な気持ちでぼんやり見つめた。毎日この電車で帰っているけれど、夕日を見たのは初めてのような気がした。

「ママ、私のお願い、叶ったね」

再び、女の子の声がした。大人の女性の声が、優しく答える。

「ふふ。そうね」

声の方を見ると、浴衣姿の母子が扉の前に立っていた。夏祭りに

でも行くんだろうか。りぼんの形に結ばれた二人の帯には、商店街の名前が入った団扇が挟まれていた。そしてその下に揺れている、白い物体——照る照る坊主。

「あっ」

僕は思わず立ち上がった。周りの数人が、横目で睨んだ。

すでに電車はホームに着き、扉が開こうとしていた。躊躇する余裕もなく、母子に近付き、話し掛けた。

「あの」

電車から降りかけていた二人は、驚き顔で僕を振り返った。

「お願いって、何ですか」

「は？」

「この子のお願いって……」

呆然としている母親の横で、女の子はにっこり笑った。

「雨があがりますように」

そう言ってから彼女は得意気に、片目を閉じた。

「あがったでしょ？」

しゅん、と扉が閉じ、電車が動き出した。

僕はしばらく遠ざかる母子を見ていたが、ふいに笑いが込み上げてきた。

「なんだ」

可笑しさをこらえ、つぶやいた。

「天気を覆したのは、神様じゃないのか」

ふと思いついた僕は、固く閉じられたパステルの傘を、ゆつくりと開いてみた。そこには、彼女がくり付けた小さな短冊が揺れていた。

“雨が上がりますように。織姫と彦星が会えますように”

一ヶ月前、雨の七夕の日。憂鬱な顔で傘をさし、歩いていた彼女が言ったのだ。「織姫と彦星が会えないなんて、かわいそうね」。それから自分の傘に、願いを書いたメモの切れ端をくり付けた。「なんだよ、それ、子供じゃあるまいし」

僕が笑うと、彼女は真剣な顔で主張した。

「だって好きな者同士なのに、会うことができないなんて、かわいそう。織姫はきつと、彦星が来る日を、胸を焦がして待っていたのよ。待つて待つて、死にそうなくらい待ち焦がれていたのに、彦星が来なかったら本当に寂しくて死んでしまう」

この時の僕には、分からなかったのだ。それが彼女の、メッセージであることを。そして彼女が何故、いつも傘を持たずに出かけるのかも、分からずにいた。彼女は天気は無頓着なわけじゃない。ただ、雨が、嫌いだったのだ。二人を隔てる川が、深く越え難くなる気がして。

“二子新地、二子新地でございます”

次の駅。扉が開くと同時に、僕は駆け出した。階段を降り、反対側に向かって走り、もう一度階段を上がった。

息を切らしながら、携帯を取り出し、彼女の会社へかけた。彼女に代わると、深呼吸して告げた。

「もしもし。僕だけど」

少し間を置いて、小さな声が返ってきた。

「どうしたの？」

「会いに行くから」

「え」

「雨は上がった。境界を越えて、君に会いに行く」

しばらく、音が途絶えて。震える声が、答えた。

「うん。……待つてる」

ホームに電車がすべり込んでくる。僕は2本の傘を置き去りにして、車両に上がった。僕を乗せた電車は、橋を渡り、彼女に向かって走った。

- END -

著者 吉野圭 『rainy days』

（後書き）

付記：東急新玉川線の「二子玉川園」駅と「二子新地」駅は、東京都と神奈川県境界である多摩川を、ちょうど挟むようなかたち（つまり対岸同士）につくられています。文中、二子玉川園駅と川的位置に誤りがありますが、そのまま載せました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4900o/>

メッセージ

2010年10月30日14時10分発行